

日仏友好160周年を迎えた 文化交流（下）

～19世紀の「ジャポニスム」から「ジャポニスム2018」まで～

元国際交流基金 吾郷 俊樹

1 はじめに

前号でご紹介した「ジャポニスム2018」は、日本が誇る文化を芸術の都パリを中心に、大規模かつ総合的に、8カ月にわたりフランス全土で紹介するもの。日本政府として類を見ない規模で文化を発信する一大事業であり、日本外交に新たに「文化」の柱を立てるフラッグシップ・プロジェクト。

政府主導により展覧会、舞台公演、映画、その他日本人の日常生活に根ざした文化まで含め、さまざまな日本の芸術と文化を幅広く紹介する50を超える公式企画と「ジャポニスム2018」の趣旨に賛同いただける方々による日本関連の自主的な企画からなる。

展覧会、舞台公演、映像、生活文化等について、その主なものをご紹介します。

2 展覧会

(1)「深みへー日本の美意識を求めてー」展

7月のオープニングでは、日本の美意識を理解する上で、新しい視点をもたらす「深みへー日本の美意識を求めてー」展を開催。8月に逝去された、「ジャポニスム2018」の提唱者である津川雅彦氏の発案を長谷川祐子東京藝術大学教授のキュレーションにより、縄文土器から現代アートまで併せて展示し、斬新な切り口で日本の美意識を解明していくもの。

これは、「ジャポニスム2018」の基本コンセプトをまとめて、全事業のいわば「目次」となるような統轄的展示。ロスチャイルド館において、伝統的な作品と現代の作品を併せた展示を通して日本の美意識を見せる。例えば、縄文の火焰型土器と、それから想を得た、若手デザイナーのアンリアレージの彫刻ドレスは異なる芸術媒体と異なる時代の間に存在する調和を表す例だという。様々なテーマや媒体の多様性（絵画、インスタレーション、写真、ファッション、彫刻な

ど）を通して、伝統と革新の2つの要素が一つになっている日本の美学に新しい視点と理解をもたらすという。

(2)「teamLab : Au-delà des limites」展



(Exhibition View, teamLab : Au-delà des limites, 2018, Grande Halle de La Villette, Paris ©teamLab)

ウルトラテクノロジスト集団、チームラボの「境界のない世界」。デジタルの滝が、高さ11メートルの壁から床へ流れ、来場者の足下で流れながら空間に広がっていく作品など、大空間を活かした様々な作品が展開。ラ・ヴィレットの約2千平方メートルの敷地に壮大な滝や花々、人物などのイメージを鮮やかに写し、来場者が描く絵も壁に投影されて作品の一部となり、その映像は触れると形を変えていく。CNNの「最も感動した視覚的瞬間」にも選ばれるなど、世界的に高い評価を得ているこのチーム、現代アートに目の肥えたシンガポール人も唸らせる常設展をシンガポールでもやっている。パリやシンガポールに行く予定のない人でも、チームラボの世界は、日本でも今年6月にチームラボと森ビルがお台場にオープンした常設の「チームラボ ボーダーレス」で体感できる。ルモンド紙も、「デジタルアートに関して言えば、1997

年から開催されている文化庁メディア芸術祭が示すように、日本はフランスの何光年も先を行っている。お台場に1万平米の「美術館」を建設し、自らの作品を展示しているチームラボによるデジタルアートの渦を、5月15日からラヴィレットで開催されている展覧会で見ることができる。」と報じる。

(3)「若冲―〈動植綵絵〉を中心に」展

江戸中期の京都で活躍し、その緻密な描写と色彩で知られる伊藤若冲。2016年の上野の東京都美術館、「生誕三〇〇年記念 若冲展」を見ようとする人で、入館の行列は最大5時間20分待ちを記録。31日間の会期に、44万6,242人が訪れた。文字通り記録的な展覧会となった。



(伊藤若冲〈群鶏図〉(動植綵絵30幅のうち) 宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

その若冲も、60数年前は、ほぼ埋もれていたという。若冲再発見の立役者、米国人の大富豪、ジョー・プライス氏によると、上野の若冲展について、埋もれていた若冲が「見事に復活する様を目にするのは、胸に迫るものがあった。」という。1953年、ニューヨークで建築家フランク・ロイド・ライトについて入った店でプライス氏が最初に購入した「『葡萄図』は墨絵の掛け軸で、西洋人の一般的な価値基準から見ると、地味な作品だろう。しかし作者の名も知らぬまま、私は雷に打たれたように見入り、この作品のとりこになった。…若冲をきっかけに広げた円山応挙や酒井抱一（ほういつ）など江戸美術コレクションの総点数は、いまや600を超える。…『ジャクチュウ』の響きが日本人の耳に根を下ろすのと歩調を合わせるように、無名だった画家は注目を集め、ここ20年ほどで若い人を中心に、人気が高まってきた。」と語る。なお、プライス氏は2006年に国際交流基金賞、2015年に京都府文化賞特別功労賞、2017年に水田三喜夫記念国際賞を受賞。

若冲の最高傑作とされる宮内庁三の丸尚蔵館（前号

で御紹介したフランス人美術史家ソフィー・リチャードが、驚くほど狭いが出かける価値がある、最高の名品揃いと紹介。)蔵の「動植綵絵」30幅を欧州で初公開。

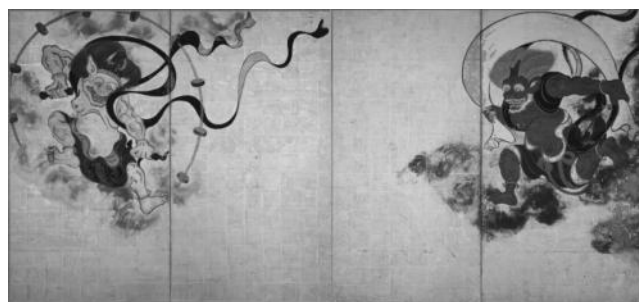
アメリカでは、そのジョー・プライス氏が若冲を含めた日本美術コレクションのための美術館（日本館）をロス・アンゼルスに建てているし、2012年にワシントン・ナショナル・ギャラリーでも「動植綵絵」全30幅が一同に展示されているが、フランスでは、「若冲って、誰？」という状況。

増田ジャポニスム事務局長によると「開催までの準備期間と作品の展示期間が短いこともあり美術館との交渉は難航を極めました。が、幸運にも、パリ市立プティ・パレ美術館のルリボー館長が、数年先の予定まで変更して調整してくださり、実現の運びとなりました。」とのこと。

現地、ボワン・ド・ビュー紙は、「動植綵絵 伊藤若冲の幸福な自然画」として「その鮮やかな色と構図の妙、モダンな描線には感嘆させられる。」と報じた。

(4)「京都の宝―琳派300年の創造」展

他の流派と異なり、師匠から弟子へ直接、技術や精神が受け継がれるのではなく、後世の絵師が私淑する先達から自由に取り入れたいところを取り入れる中で、流派のようなものが形成されていったという琳派。尾形光琳が俵屋宗達に、酒井抱一が尾形光琳にそれぞれ傾倒し、その影響を受けたように、時代や身分を超えて、断続的に継承された。パリ市立テュイルリ美術館での本展では、日本国内でも公開される機会の稀な「風神雷神図屏風」のような国宝、重要文化財を含め琳派の傑作を選びすぐって展示。琳派芸術の中心をなす絵画をはじめ、陶芸、漆工などの調度品も取り上げ、日本美術の粋ともいえる琳派の総合性を示す



国宝〈風神雷神図屏風〉俵屋宗達筆 京都・建仁寺蔵 江戸時代

とともに、その絢爛豪華な様式美、現代の生活美術全般にも通じる斬新なデザイン感覚を紹介。

(5)「古都奈良の祈り」展

前号で紹介したギメ東洋美術館とともに奈良県が主催し、奈良県が誇る国宝級の仏像を展示。

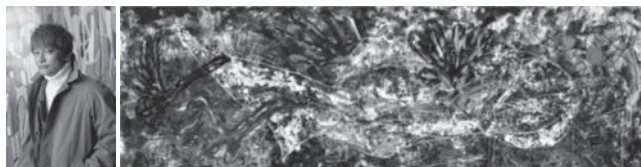
奈良県では、「ジャポニスム2018」を、奈良への関心を深め、奈良県への来訪を促す絶好の機会と捉え、当行事に積極的に参画することで比類なき歴史文化資源を有する「日本のはじまり」奈良の奥深い魅力を発信するもの。

本展では、名刹・興福寺で大切に守り伝えられてきた至宝のうち、「木造地藏菩薩立像」(重要文化財)と「木造金剛力士立像(阿形・吽形)」(国宝)を厳選して展示。普段は奈良を訪れなければ味わえない、眼前の仏像から放たれる美しさや迫力、その精神性の一端を伝える貴重な展示をとおり、シルクロードの東の終着点として日本文化の礎を築いた古都「奈良」の新たな魅力を紹介。

(6) 名和晃平彫刻作品「Throne」

パリで美術と言えば、やはりルーブル美術館。その入り口ピラミッド内に高さ10.4メートル、重さ3トンの巨大モニュメント。現代芸術家、名和晃平の金びかの「Throne」(玉座)。その玉座は空位。ル・モンド紙は、「…大作「Throne」は、スター・ウォーズの世界と仏教思想を掛け合わせたかのような作品だ。「現代社会において、玉座に座っているのは一体誰なのか? 将来は誰が座るのか? この玉座をあえて空席のまま残し、こうした問いを投げかけたかった。」と名和は説明する。」という。

(7)「香取慎吾 NAKAMA des ARTS」展



写真右:「Lie.ARIGATO」

ルーブル美術館に隣接するカルーゼル デュ ルーブル シャルル5世ホールでは、「ジャポニスム2018」の広報大使も務める元SMAPの香取慎吾が、「アート

を題材にしてNAKAMAとつながりたい」とのコンセプトのもと、絵画、オブジェだけでなく、ファッション、そして「新しい建築」とのコラボレーション作品を紹介。香取慎吾初の個展となる。

インスタグラムのフォロワー100万人を超える香取は「アートにゴールはないと思い続け、描き続けている僕ですが、目指すゴールと言ってもおかしくないルーヴル美術館でスタートできることに、僕のアート脳が爆発しています。たくさんの人に僕を感じてもらいたいです」とコメント。

(8)「縄文展」

縄文文明について、レヴィ＝ストロースは、「人類諸文化のすべてをみても、これに比肩できるものはありません。」「これほど古く遡ることができる土器づくりの技術は他に知られていません。」「そしてとりわけ様式が独創的なのです。」と語ったという。1998年、パリ日本文化会館で開催した「縄文展(JOMON): l'art du Japon des origins」は日本の芸術に造詣の深いフランス人に新鮮な驚きとともに迎えられ、多くの人々を魅了したという。

藤井宏昭 元国際交流基金理事長によると、日本の「基調文化とは何なのか。それは縄文の文化に他ならないのではないだろうか。…旧来の世界史の教科書では、…人類は常に移動していたが、今から1万年超前にメソポタミアで農耕、牧畜を始めることによって定住し、第二段階に入ったとされている。しかし、日本列島においてはそれより更に4~5千年も前から定住していたと考えられる。…定住することによりコミュニティが出来、また分業と文化の継承が可能となった。」という。

「縄文展」は、この夏、東京国立博物館で開催された特別展「縄文—1万年の美の鼓動」をパリ向けに再構成するもの。縄文時代の美を体現する国宝火焰型土器をはじめとした土器に加え、土偶や装身具など、多くの国宝や重要文化財を含む出土品を一同に紹介し、日本美の原点である縄文の美と、それを生み出した縄文人の豊かな精神性の魅力を提示する。

(9) マンガ、アニメ、ゲーム

個人当たりのマンガ消費量が日本に次ぎ世界第2位

と言われるフランスでは漫画、バンド・デシネ（bande dessinée）はルーヴルも、「建築」「彫刻」「絵画」「音楽」「文学（詩）」「演劇」「映画」「メディア芸術」に次ぐ第9の芸術と位置づけているという。

「MANGA⇄TOKYO」展（会場：ラ・ヴィレット）では、都市〈東京〉の特徴や変化を、鏡のように映しだしてきた日本のマンガ・アニメ・ゲーム・特撮作品を多数の原画や模型、映像などでたどるもの。

この他、舞台公演として、2.5次元ミュージカル（2次元の漫画・アニメ・ゲームを原作とする3次元の舞台コンテンツの総称）。2015年3月に渋谷で2.5次元ミュージカル専用劇場として運用が始まったAiiA 2.5 Theater Tokyo では、4か国語に対応する“メガネ型字幕システム”でインバウンド需要にも対応し、ほぼ100%の稼働率とのこと。今回上演されるセーラームーンが原作の【2.5次元ミュージカル】“Pretty Guardian Sailor Moon” The Super Live（パレ・デ・コングレ・ド・パリ 大劇場）は、今ではミュージカルを観るために多くの外国人も日本に訪れるほど2.5次元ミュージカルを代表するビックタイトルとなっているという。

（10）「安藤忠雄 挑戦展」

光の教会、直島ベネッセハウスなどの設計で知られる安藤忠雄は、フランスでも人気。そういえば、直島の美術館でフランス語版の安藤忠雄のガイドブックが売られていた。独学で建築を学び、デビュー以来、常に新たな作品で建築界に衝撃を与えてきた。ポンピドゥ・センターで開催される本展は、これまでの活動の軌跡とこれからの展望を、模型、スケッチ、ドローイングや映像などを通して紹介。

（11）「藤田嗣治展」

マクロン大統領からのメッセージでも触れられていた藤田嗣治は若くしてパリにわたり、戦前の日本人画家では唯一、高い評価を受けたという。本展では、最初にパリに渡った1913年からパリを離れる1931年までの作品、中南米を旅し日本に戻り、東京を起点に日本各地や中国から東南アジアまで足を延ばした1930－1940年代の作品、さらには戦後、終の棲家と定めることとなるフランスへのオマージュとして制作された作品を紹介。なお、今回は出品されていない

が、藤田の大作、「ノルマンディーの春」は関西日仏会館の設立記念にあたり藤田から寄贈され、今もアンスティチュ・フランセ関西のロビーを飾る。

5 舞台公演

（1）和太鼓 DRUM TAO「DRUM HEART」

欧米に限らず、アフリカでも、中央アジアでもどこでも受けるのは太鼓らしい。パリでも、オープニングは世界23か国、500都市、観客動員数700万人の世界を魅了する和太鼓集団「ドラムTAO」の公演で始まった。コシノジュンコのデザインした衣装で、力強く切れの良い動きのパフォーマンスは、時にはユーモアも交え、観客を飽きさせることなく、2時間の大迫力の舞台。観客は全員スタンディングオベーションで讃えたという。

（2）松竹大歌舞伎

日本文化の海外での舞台公演の定番と言えば、やはり歌舞伎。今回も、9月14日から1週間、松竹大歌舞伎がエッフェル塔の対岸にある国立シャイヨー劇場のシーズンオープニングを飾る。11年ぶりのパリ公演は、中村獅童と中村七之助のパリデビューで、「歌舞伎十八番の内 鳴神（なるかみ）」、「色彩間借豆（いろもようととかりまめ） かさね」を演じた。



「鳴神」の鳴神上人：中村獅童（左）と雲絶間姫：中村七之助（左）
©松竹株式会社

下総国羽生村の木下川（きねがわ）堤で、与右衛門と腰元かさねは道ならぬ恋の末、心中を決意。そこへ、草刈鎌が突き刺さった髑髏と卒塔婆が川面に流れてくる。かつて自らが殺めた男の髑髏と気付いた与右衛門が、鎌を引き抜いて髑髏を割ると、かさねが顔を押し付けて苦しみ出し…という全編に歌舞伎の様式美が溢れる舞踊劇の名作。公演では、奥女中のかさね（獅童）が姿を見せた途端、女方の所作の美しさと客の目を釘付けに。クドキでは与右衛門（獅童）を相手にかさねが女心を視覚的に表現し、その切ない思いを客席

に伝え、与右衛門の立廻りでは様式美をたっぷりと見せ、醜く変貌したかさねに斬りつけて修羅場となった二人の立廻りでは、連理引きなど歌舞伎ならではの技法も披露、最後まで息をもつかせぬ張りつめた空気が劇場に満ちたとのこと。

平安時代、朝廷に恨みを抱いた鳴神上人は、世界中の龍神を滝壺に封じ込め、その結果雨が一滴も降らなくなる。そこで、鳴神上人の行法を破り雨を降らせるべく、帝は雲絶間姫を鳴神上人のもとに差し向けるが…。美貌の雲絶間姫の色香によって高僧である鳴神上人が墮落、破戒する分かりやすい筋立てで、男女の愛欲情痴を描き出す。前半は古風でおおらかな台詞劇、後半は豪快な荒事と見どころの多い一幕。軽妙なやりとりで和ませ、雨を降らせないほどの力を持つ高僧（獅童）が、妖しいほどの色香を放つ姫（七之助）に籠絡されていく様子は、古典歌舞伎らしいおおらかな演技で見た目にも面白く、パリの観客をぐいぐい引き付けていき、ぶっ返って（一瞬の衣装替え）からは柱巻の見得から六方の引込みまで、鳴神上人の見せ場が続き、大きな拍手と歓声が幕が降りた後も長く続いたとのこと。ル・フィガロ紙も「シャイヨー劇場で、日本の伝統芸能 歌舞伎2作品が上演された栄誉」として、「この華麗な芸術がフランスで公演されたのは非常に稀少な機会であり、一大イベントである。」と報じた。

(3) 能楽、狂言

ラグビーが貴族の、サッカーが庶民のスポーツであるように、かつて、能は武士のもの、歌舞伎は庶民のものだったという。詩人大使、ポール・クローデルも能には高い関心をもっていたのみならず、自らの文学作品にも能の手法を取り入れるなどその影響を受けている。来年2月、シテ・ド・ラ・ミュージックで、野村萬、梅若実、浅見真州ら現代一流の能楽師による本格能舞台。

ただ、歌舞伎のように観ていてストレートに内容がわかるものでもないの、生の能は武士でない日本人が見ても最後まで意識を保つのは難しいかもしれない。耳で聞いても分からないなら、台本を読んだら分かるかと思って、かつて司馬遼太郎がトラックで乗り付けて大人買いをしていったという古本屋で山積みの

台本を見たが、やはり門外漢には理解困難。

当然、生の能を理解してもらうのはフランス人にも難しいかもしれない。今回も「宮本亜門演出 能×3D映像「幽玄」では、演出家の宮本亜門が、観世流能楽と3D映像を初めて融合させた新たな日本文化を創造。ヴェルサイユ宮殿にて、能の演目「石橋」と「羽衣」をベースに3D映像で日本の自然を表現し、美しき日本の幽玄の世界を舞台上に再現。3Dメガネで、3D映像と能による美のコラボレーションを楽しむ。日本の伝統芸能と最新テクノロジーの融合。



（「宮本亜門演出 能×3D映像「幽玄」©KOS-CREA 写真提供：国際交流基金（赤獅子：観世三郎太、白獅子：坂口貴信）

狂言も現代風にアレンジ。フランス芸術文化勲章オフィシェを受章している現代芸術作家・杉本博司による舞台空間の中、人間国宝野村万作、2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開会式・閉会式の演出も務める野村萬斎、野村裕基による親子三代による「三番叟」。

(4) 雅楽、人形浄瑠璃文楽、日本舞踊

この他、伝統芸能では、宮内庁楽師だった東儀秀樹が現代音楽と共演したCDを出して注目を浴び、最近人気が高まっているという雅楽。宮内庁式部職楽部による雅楽のほか、元宮内庁楽師で、雅楽師として初めて文化勲章を受章した芝裕靖を中心に結成した雅楽の演奏グループで、世界各国で公演をしている「伶楽舎」が現代風雅楽作品を演じる。9月3日の宮内庁楽部の42年ぶりのパリ公演では、ゆったりとしながらも躍動感のある舞が満席の観客2400人を惹きつけたという。ユネスコ無形文化遺産に登録されている舞台芸術・人形浄瑠璃文楽や、人間国宝・井上八千代、富

山清琴を初め、伝統を受け継ぐ現代を代表する舞踊家と演奏家による日本舞踊も演じられる。

(5) 現代劇ほか

伝統だけではない。蜷川幸雄が村上春樹の原作の世界観を世界の蜷川ならではの壮大なスケールで舞台化した「海辺のカフカ」のパリ初演、野田秀樹演出の現代劇「贗作 桜の森の満開の下」の国立シャイヨー劇場での公演などの現代劇や、更には、2007年に発売された歌声合成のソフトウェア、「初音ミク」のコンサートも開催。

以前に招待で見た、初音ミクと和太鼓のチームとのコンサート。コアなファンで会場一杯。コンサートが始まるとたちまち、皆、専用のペンライトを持って総立ち。生身の人間ではないので、衣装替えも一瞬で、休憩も要らないので、ノンストップのステージ。既に日本国内はもとより、北米、アジアには行っているが、今回はヨーロッパ初上陸。

6 映像

(1) 河瀬直美監督 新作「Vision」特別上映

丁度、今年のカヌ映画祭では是枝監督の「万引き家族」がパルム・ドール（最高賞）をとったところだが、「殯の森」で2007年に同じくカヌ映画祭でグランプリをとるなど数々の賞を受け、日本人映画監督として初めて同映画祭の審査委員に選ばれるなど、とりわけ、フランスで高く評価されているのが河瀬直美監督。

ジャポニスム2018のオープニングを記念し、新作「Vision」を11月のフランス国内一般公開に先立ちお披露目上映。監督の故郷、奈良を舞台に世界三大映画祭すべてで女優賞を獲得したフランスのジュリエット・ピノシュと、日本の永瀬正敏がダブル主演の日仏合作映画。フランスの女性エッセイストが日本を旅し、神秘の森、吉野の山々を守る山守の日本人男性と心通わせる物語を描いた映画上映をシネマテーク・フランセーズで開催。

(2) テレビ日本月間

テレビの影響力は強い。サッカーワールドカップでフランスを初優勝に導いたジダンも日本のアニメ

「キャプテン翼」に憧れてサッカーを始めたというし、ブラジルで一番有名な日本人は、2位の本田圭佑らを抑えて、日本では知られていない日本の変身ヒーロー番組「巨獣特捜ジャスピオン」の主演、黒崎輝（くろさきひかる）だという。ジャポニスム2018では、9月に文化・教養専門チャンネルARTEでは、日本をテーマとする特集を組み、さまざまなジャンルの日本関連テレビ番組を集中的に放送。幅広い層に向けて、日本人の生きた暮らしや社会、日本で育まれてきた文化芸術、日本人の考え方や感じ方を伝える企画。NHK、ARTE他の日仏関連機関が共同制作した、歴史や紀行、人々の生活を扱ったスケールの大きなドキュメンタリーも放送した。

(3) 日本映画の100年



「剣戟ブーム」を起こした記念碑的作品、1925年の阪東妻三郎のサイレント映画、『雄呂血』©Matsuda Film Productions

ご存じ北野武監督はフランスの最高勲章レジオンドヌール勲章を受章、この他、小津安二郎や黒澤明、大島渚監督の知名度は抜群という。ここでは日本映画の歴史を深掘りし、日本映画の100年の歴史を119本の映画で紹介する。1920年代の作品から2018年の最新作まで、日仏の専門家が共に選んだ映画を3部構成で特集。

皮切りの第一部（2018年9月～10月）では、フランス映画文化の中心拠点、シネマテーク・フランセーズで、1920～1940年代の映画27本を上映。日本映画の発芽期から黄金期が始まる時代の作品をカバー。あわせて、サイレント映画に命を吹き込む活動弁士と楽士による公演も実施。

第二部「日本映画再発見」は、黒澤明監督の羅生門

など第二次世界大戦後から2000年代までの、厳選された映画約55本を上映。第一セクション（2018年11～12月）はまず、誰もが知る作品を、最新技術で生まれ変わったデジタル修復版で再発見する機会を提供。第二セクション（2019年1～2月）はフランスではまだ知られていない名監督の作品と、よく知られている監督の知られざる傑作を紹介。

第三部（2019年1～2月）は今活躍中の監督の作品を紹介。2018年に公開される最新作も数本含め、新海誠監督の「君の名は。」や大林宣彦監督の「花筐」など、現在の日本映画界を牽引する巨匠から若手監督までの作品37本で、日本映画の今を伝える。

なお、事業の一部は、トゥールーズやリヨン等フランス国内の別都市にも展開。

(4) KINOTAYO 現代日本映画祭

現代日本映画に絞ると、フランス最大の日本映画祭として、2006年の創設以来、多くの人が毎年楽しみに待ち望んでいるKINOTAYO現代日本映画祭。フランスでの公開前の最新作を含め、幅広いジャンルの日本の現代映画を数多くフランスに紹介してきた。第13回映画祭は、「ジャポニスム2018」の一環として、例年にも増して魅力的なプログラムを用意。

この他、ポンピドゥーセンターで河瀬直美監督特別展・特集上映、日本文化会館他で、「歌舞伎役者 片岡仁左衛門」特別上映会、「FUJITA」特別上映会を開催。

生活文化

生活文化も重要なコンテンツ。日本の生活文化が広く知られることは、訪日外国人の増加や日本製品の輸出振興にもつながるもの。

(1) 「日本の食と文化を学ぶシリーズ」

まずは、何といってもグルメ大国フランス。小倉和夫前国際交流基金理事長、元駐フランス大使曰く、「『世界の三大料理は何か』という話をしますと…フランス料理は、誰もが三本の指に入れる料理でしょう。」という。辻料理学校の創設者、辻静雄曰く「フランス人のフランス料理に関する執着心は、とうてい日本人の日本料理に対して持っているものとはわけが違うの

だ。つまり、原則として彼らは自分の国の料理しか食わないのだ」。

ただ、デザイナーの森英恵はフランスと日本の食卓を比較し、「食事というものに対する考え方、捉え方に共通するものがある…食卓でも季節感、自然を大切にするような心持は、日本と似ている」という。和食、食材、酒などを、フランスのシェフや主婦が取り込めば、きっとフランスにとどまらず、食の世界での影響が期待できる。フランスでは仏人シェフが日本食材を取り寄せて自分の料理に使う動きが活発になっているともいう。

「日本の食と文化を学ぶシリーズ」では、フランスのシェフ、調理師を志す学生から一般・子供まで、さまざまな層を対象に、お菓子やお茶も含めた日本の食文化を学ぶためのセミナー・ワークショップを開催。理論と実践で日本の食の魅力を伝え、和食が既によく知られているフランスで、より深く、より広く、日本食を学び、理解し、堪能してもらうための試み。日本の食の魅力と楽しみ方を伝えるセミナー・ワークショップシリーズを開催。各対象層に合わせたテーマを回ごとに設定して、日本の専門家を講師として講義と実習を行う。

シェフやその卵向けには、調理師職業リセ他（パリ、クリシー、ストラスブール、トゥール等）フランス料理にも応用できる日本食材、出汁やうまみ、日本料理特有の調理技術、日本茶等がテーマ。また、一般の人々や子供には、パリ日本文化会館で、「手まり寿司・巻き寿司」「お好み焼き」「どら焼き」など、フランスで入手が可能な材料で、自宅で気軽に作れるメニューを取り上げる。

本プロジェクトの一部はパリ以外への都市・地方でも開催。

(2) 「日本の食と文化を楽しむシリーズ」

1867年のパリ万博では、茶屋で3人の芸者にみりん酒とお茶をサービスさせて大評判になったという。「みりん酒」とは、味醂を等量の焼酎で割ったもので、口当たりが甘いので下戸や女性に喜ばれたという。今回も酒は重要な要素。最高級の日本酒でもワインに比べれば随分リーズナブル。パリで日本文化に対する関心が高まるこの時期に食通に酒の良さを体感してもら

えれば、今後の酒のプロモーションにも効果的。オープニングなどの節目には、国税庁、日本酒造組合中央会などからの酒の提供により、会場を盛り上げている。

パリでは、今年5回目を迎える、Salon du Sakéというイベントが秋に開催。ヨーロッパは現在、前例のない日本酒輸入量の一大成長期を迎えており、その規模はアジア市場を超え、北米市場をも大きく上回るほど。2017年の統計では、欧州全体への日本酒売上げは全体で21%増。輸出量では28%増で、フランスに限れば57%増を記録。人口7億人を超えるヨーロッパは、世界一の市場となりえるという。料理とワインで知られる美食の都・パリで行われるSalon du Sakéは、日本の生産者と欧州のマーケットとの架け橋として、ますます注目が集まっているという。



《酒巡りin Paris》にて。フランス料理と日本酒のマリアージュを楽しむフランスのインポーターたち、日本酒造組合中央会提供

また、これとは別にKURA MASTERというフランスで2017年から開催されている日本酒のコンクール（品評会）もある。これはフランス人によるフランス人のためのフランスの地で行う、日本酒のコンクール。同時に、「フランスの歴史的食文化である《食と飲み物の食べ合わせのアバンチュール》を、…フランス的にロジックに判断していただくことでフランス市場における日本酒をアピールする場を提供する」という。審査員は、フランス人のソムリエ、レストラン関係者、ホテル・料理学校関係者などのプロフェッショナルな方を中心に構成。また審査だけではなく、日本酒講習会を開いたり、蔵元訪問などの機会を多くオーガナイズし、品評会コンクールを通して、マーケットを拡大していくという。実際フランス人の感覚だと、

これまでにない結果が出たりする。7月、最優秀のプレジデント賞の結果にどよめきが起こったという。賞に輝いたのは、純米吟醸や純米大吟醸を押しつけて、純米酒だったからだ。

パリ市内のレストラン、カフェ、ワインバー等の協力を得て、日本酒や日本茶など日本の「味わい」に触れて、楽しんでもらう機会をパリで提供して、「ジャポニスム2018」を広く盛り上げる参加型企画が「日本の食と文化を楽しむシリーズ」。

その一つが、パリ市内の様々なジャンルの料理店が日本酒蔵元とそれぞれタッグを組み、各銘柄と相性の合うメニューやアラカルト一品を考案して、その日本酒とともにお客様に提供する特別週間を、Salon du Saké直前のプレ企画として実施。公募により選ばれた24の蔵元が、パリ市内の24軒のレストランとマッチングするグルメイベント《酒巡りin Paris》。各銘柄に合わせて各レストランが考案したメニューや自慢の一皿は、日本酒の繊細さをより引き立てる。

その他、ワインバーに通うワイン愛好家に日本酒の味わいを発見してもらう企画《日本のお酒試飲の夕べ》、カフェやレストランでの日本茶お試し月間《日本茶月間》等の企画も。

(3) エッフェル塔特別ライトアップ 《エッフェル塔・日本の光を纏う》

パリの象徴、エッフェル塔をライトアップ。フランスのランドマークに日本の文化を重ねるアート作品。

エッフェル塔は、フランスで国家的な行事や国際的な催事がある度に光技術を駆使したライトアップにより、夜の顔として美しい光の衣に包まれてきたという。今回は「ジャポニスム2018」を記念して、初めてエッフェル塔が日本を題材とする光のアートを身に纏う。エッフェル塔の対岸の国立シャイヨー劇場での松竹大歌舞伎のオープニングの晩、歌舞伎座のライトアップも手がけた石井幹子、石井リーサ明理の企画デザインによる日本画をモチーフとしたデザインも含めて約10分間の光のショーで、日本の色をパリの夜空に浮かび上がらせた。

(4) 地方の魅力—祭りと文化

10月、徳島県など14の地方自治体と連携し、阿波

踊りなど各地伝来の7つの祭り・踊りと淡路人形浄瑠璃など15の民族芸能公演や生活文化企画を11日間にわたり地方の魅力を集中的に紹介。まだフランスで十分には知られていない部分も含め、日本の各地方に根ざした、彩り豊かな文化を伝える。

パリ日本文化会館にて、いろいろな土地に伝わる、民俗芸能公演、工芸品製作実演やワークショップ、写真パネル等の展示、講演等を通じ、日本の中にいかに彩り豊かな地方文化が育まれているか、それぞれどういう歴史を持ち、どのように育まれた文化なのか、各地はそれらをいかに活用し、守り、継承していこうとしているのかを、楽しく伝える。

会期中の週末には、パリ市民憩いの場所、アクリマタシオン庭園で、各地伝来の祭りや踊りを、華やかなパレード形式で、またステージを使って披露。見学に訪れる方々が一緒に踊りに参加することを期待。フランスには和食店もラーメン店も沢山あるが、まだパリでも馴染みの比較的薄い古き良き日本のノスタルジーを感じさせてくれる各地の「B級グルメ」を紹介する屋台や、観光ブースの設置も予定。

この他、伝統工芸、いけばな、茶の湯、禅など伝統的な生活文化に加えて、今や競技人口が日本の4倍、約80万人柔道やスポーツ交流も企画。

8 外交と文化

フランスの外交官は、フランスの文化が外交のツールとして有効な武器であることをよく理解しているという。世界中にアンスティチュ・フランセという文化機関を持ち、その幹部は大使館の外交官が兼任。アンスティチュ・フランセは、日本の5都市（東京、横浜、京都、大阪、九州）に拠点があり、2.5万人にフランス語教育を提供し、京都ではアーティスト・イン・レジデンス（芸術家を招聘し、その土地に滞在しながらの作品制作を行わせる事業）も実施。

フランス外務省のマセ次官（前駐日大使）によると、「文化外交を起点とする影響力外交は、フランス外交の極めて重要な一要素になりました。国際的な生活は各社会間の相互作用でますます成り立つようになり、多くの分野で国境が消えています。まさにそのために、われわれは言語、文化、魅力、知識など、影響力外交に力を注いでいるのです。われわれがこの変容

する世界で道しるべとなるため、われわれの地位を確立するため、われわれの価値観…と同時にわれわれの利益のためです。というのも創造産業や文化産業は、われわれの経済にとって極めて重要な切り札であり、平和を前進させるための切り札だからです。

われわれは包括的な外交を進めています。経済外交や戦略的外交と、文化外交とが別々に存在しているではありません。これらは一つの全体を成します。」

フランス外交官と直接話したければ、フランス関連の文化行事に行くと会えるかもしれない。例えば、フランスで最初に国葬された画家、ジョルジュ・ルオー（1871－1958）の常設展を持つ、パナソニック東京汐留ビル内にある「パナソニック汐留ミュージアム」。前号で御紹介したフランス人美術史家ソフィー・リチャードも「世にあまり知られていないデザイナーや、めったに見られない展示品と出会うにはうってつけの美術館」「日本のデザインは全世界の憧れの的。ところがそれが見られるところは日本国内にほとんどありません。」と紹介。ここで、フランス関係の展覧会の内覧会に行くと、運が良ければ、駐日フランス大使が来賓として出席し、レセプションで挨拶をされるのでお話ができる。

翻って、日本はどうか。六本木のある高名な美術館の館長から聞いたのは、「日本の外交官には、『自分は安全保障ばかりで、文化はやったことがない。』』ということ自慢にしている人が多い。」ある外交官からも、「外交官は大使になって初めて文化が外交でも有益だと気付く。それまでは、政治、経済がキャリアの外交官の仕事だと思っている。それではもう遅い。」と聞いたことがある。

外交青書2018には、ジャポニスム2018についての言及は見当たらないようだが、ジャポニスム2018の意義などについても、果たして外交官のどれくらいがご存じだろうか。

9 パリ日本文化会館

パリのエッフェル塔の近くにあるパリ日本文化会館。1990年代に日仏間で経済摩擦が厳しかった頃、官民共同でオープンしたこの施設、世界最大の日本文化センターで、大小ホール、展示ホール、図書館、茶室、教室などを備える。初代館長は元NHKニュースキャスターの磯村尚徳氏。オープニングには当時のシ



エッフェル塔近くにある、中国も羨む日本文化会館、写真提供：国際交流基金

ラク大統領も来られたが、今も各国からの視察が相次ぎ、最近も中国の文化担当大臣が視察して、「我が国にもこのような施設があると良いのに。」と感心して帰って行ったという。

今回も縄文展、藤田嗣治展、日本映画の100年、地方の魅力「祭りと文化」など多数の公式企画を開催する他、情報センターが設置され、会館内だけでなく、全ての公式企画に関する日時、場所、内容などの情報を提供。加えて、日本の観光案内など、日本に関する各種の情報も提供。

「ジャポニスム2018」後は、中国も羨むこの施設を日本文化を発信するような地方公共団体や企業のプロモーション活動にも積極的に利用促進をしていくという。

⑩ おわりに

9月、日仏友好160周年にあわせた仏政府からの招待により、皇太子殿下が訪仏された。その間、パリでは、若冲展のオープニングに出席され、松竹大歌舞伎をご覧になり、その幕間には、エッフェル塔のライトアップの点灯もされたほか、ヴェルサイユ宮殿での宮本亜門演出の能×3D映像「幽玄」をマクロン大統領ご夫妻とご一緒にご覧になった。現地のAFP通信によると、「マクロン大統領が外交の切り札、ヴェルサイユで日本の次期天皇陛下を迎える」として、「マクロン大統領が外交の切り札として壮麗なヴェルサイユ宮殿を選んだのはこれで3回目。今回は日本の徳仁皇太子殿下をお迎えするためだ。…お二人は伝統芸能と3D映像が融合した能の舞台をオペラ・ロワイヤルで観劇した。」。また、ポワン・ド・ビュー紙によると、

「来年5月1日に日本の第126代天皇に即位する皇太子徳仁親王が、9月7日から14日まで、日仏友好160周年に合わせてフランスを公式訪問した。リヨン、パリ、グルノーブル、サントネを訪れた。両国文化に注目を集めて、一般の市民と交流する機会となった。…翌12日の一大イベントの舞台はヴェルサイユ宮殿。徳仁親王は前庭でマクロン大統領に迎えられた後、ヴィクトワール王女の居室で会談。ルイ15世治世下に建設されたオペラ劇場で、「ジャポニスム2018」の一環として上演される能の舞台を鑑賞した。」



エッフェル塔のライトアップ点灯式の皇太子殿下
©KOS-CREA 写真提供：国際交流基金

国際交流基金の安藤理事長は、「日本は安全で、安定していて、食べ物もおいしくて、本当に素晴らしい国だと思うのです。しかし、いかに素晴らしい国であるかということが、まだ世界に十分知られていないので、特に、ヨーロッパに対してもっと紹介していかなければならない。現在の訪日外国人旅行者数のうち、ヨーロッパの人たちはわずか4%ぐらいです。世界の基準を作っていく肝心要のヨーロッパの人達がまだ日本のことを知らないのですよね。」と語る。

増田事務局長は、「「ジャポニスム2018」を通じて、日本人とフランス人が感性を共鳴させ、協働すること、さらには共鳴の輪が世界に広がることを心から期待しています。また、日本人の美意識や価値観が混迷する国際問題の解決のために少しでも貢献できれば幸いです。」と語る。

かつて、200数十年に及ぶ鎖国の後、万国博覧会での日本の出品を契機にジャポニスムが、世界を驚かし、長きにわたり、席卷したというのが、「ジャポニスム2018」が今日の世界にどのようなインパクトを与

42 ファイナンス 2018 Nov.